OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ネット中毒は孤独感を誘起するか
Author(s)	中川, 祥一
Citation	年報人間科学. 2008, 29-2, p. 43-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8480
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ネット中毒は孤独感を誘起するか

中川 祥一

〈要旨〉

近年、「ネット中毒」という現象が注目されつつある。しかし、高い信頼性を持ったデータにおいて、ネット中毒についての研究は十分に行われたとは言えない。そこで本論では、より高い信頼性を獲得するために、橋元良明らが行った全国的な調査を二次分析した。

インターネットと孤独感を扱った先行研究では、Kraut et al.（1998）が「インターネット・パラドクス」という概念で、インターネット利用が孤独感を誘起することなどが指摘された。そのひとつの仮説として、インターネットが「弱い絆」を形成させる代わりに「強い絆」を衰退させるため、孤独感につながるとしている。これを、Krautらが論じたインターネットの利用量ではなく、本論では、ネット中毒のような質的な利用形態から、その実態を検証した。

分析の結果は、以下のとおりである。第一に、ネット中毒と孤独感の強い連関が認められた。第二に、孤独感がネット中毒を誘起するのではなく、ネット中毒が孤独感を誘起する因果関係を見た。しかし第三に、孤独感とネット中毒の媒介変数として「弱い絆」「強い絆」の議論が不適切であることを示した。第四に、ネット中毒傾向にあるものが、自己開示傾向という「強い絆」志向ともいえる側面が見られることから、それが満たされない場面との落差によって孤独感が導かれている可能性を示唆した。こうしてKrautらの分析は、ネット中毒から見れば適否それぞれの面があることを確認した。

キーワード

ネット中毒、孤独感、インターネット・パラドクス、強い/弱い絆、自己開示

1. 問題の所在

最近の調査によると、インターネット[1]の利用者は八七五四万人（総務省「通信利用動向調査」2006）となっており、これはますますの増加傾向にあり、日常生活は大きく変容を遂げている。情報を受容したり発信したりすることが容易になり、それ以前の社会では力を持ち得なかった一市民や個人が、マスメディアと対峙することも容易になった。また、コミュニケーションの質も変容し、時間や場所を問わず様々な交流が可能となった。逆の意味では、二四時間、三六五日、絶え間なく情報やコミュニケーションなどを気にしなければならない「コミュニケーション・サバイバル[2]」（岩田ら2006）という状況も生まれている。情報化社会において、情報の生成変化は目まぐるしくなり、あらゆる場面で情報戦に巻き込まれざるを得なくなる局面も日常化した。

このようなインターネットが不可欠となりつつある時代において、それなしではいられないと強迫的に没頭するケースが起こりつつある。いわゆる「ネット中毒」とよばれる現象である。海外においては死亡事故すら報告されており、喫緊に研究がなされる必要があるだろう。また先日、米医療情報学会（AMA）が、「『インターネット／ビデオゲーム中毒』を『精神障害の診断と統計マニュアル（DSM）IV』の次の改訂版に正式な診断名として含めることを『強く推奨』している」（ITmedia 2007.6.15）と報じられた。医療的にも、社会的にも、ネット中毒に関心が集まっている。

本論では、ネット中毒を分析するうえで孤独感に焦点をあてる。その理由はいくつかある。まず、後にも見るKrautらの研究では、「精神的健康」を測る指標のひとつとして、「孤独感」が重要な意味を持つように、インターネットが及ぼす影響を考える上で、避けては通れない研究である点である。中村（2002）など、インターネットを含むコミュニケーションメディアと孤独感の分析は数多くなされており、進展中の研究領域である。

また、孤独の最たる現象である「ひきこもり」ともインターネットは結び付けられて論じられることが多く、樋口（2006）は孤立する「準引きこもり学生」が、パソコンなどに親和的な生活を送るとしている。しかし、井出（2007）が、ひきこもりは社会性が求められるネット空間を忌避する者が多いと論じている[3]。これらに見るように、孤独とインターネットの関係性は一筋縄ではいかない問題であることがわかる。

孤独感とネット中毒との関連については、これを示唆する研究がある。Young（1998＝1998）は、ネット中毒をもたらす原因として孤独感が最も多かったと集計しており、日本でも、小林ら（2001）は大学生を標本としたものではあるが、ネット中毒と孤独感の相関を実証的に報告している。しかし、因果関係を確言できるレベルには到達できておらず、その意味で、本論で、インターネットと孤独感の関係性を検証することは、社会学的意義を持つ。

ネット中毒に関する研究は主にアメリカで蓄積されているが、日

本でも少しずつではあるがなされつつある（和田 2001；長田・上野 2005 など）。臨床から精神科医の報告もある（墨岡 2001；袖山ら 2003 など）。しかし、心理学や精神医学的な分野で研究が蓄積されているが、社会学的に扱ったもの（特に実証的な研究）は少ない。さらに、研究対象が特定の層やネット利用者に限るなどして行った調査がほぼ全てであり、それに対して、今回扱うデータは全国区で、二段無作為抽出法によって抽出されたものであり信頼性の観点から、いっそうの成果が期待されるものといえる。このような点が、本論の意義である。

2．背景

2．1．ネット中毒について

ここで、ネット中毒の定義をみたい。ただし、Griffiths が「中毒を定義するのは、木か森か〔の区別を〕を定義するようなものだ」（Griffiths 1998:62、亀甲カッコ内引用者補足）と述べるように厳密なものは難しく、定義を示さない論文も多い。おおよそ、その症状を見て総合的に診断されたり、測定されたりするようだ。Young（1998=1998）をまとめれば、意図した時間以上にネット空間にい続け、ネットをやっていないときに不安や苛立ちを感じ、ネットなしではいられなくなり、仕事や勉学などに支障をきたすようになることである。そのような行動と、そのときの感情への中毒性のいずれの要素もあるという。他の論者もおおむねこのような論述をしている。

Young（1998=1998）などでは、ネットの利用時間も、ネット中毒のひとつの診断基準とするような記述も見られるが、Griffiths（1998）や Johansson and Gotestam（2004）では、利用時間とネット中毒との相関はそれほど強固ではないと実証している。本論でも、その内実は重なるところも大きいものの、利用時間という量とネット中毒傾向という質の問題は位相が異なるものとしてとらえたい。

ここまで、「ネット中毒」と断りなしに使用してきたが、同様の現象を表す用語は多い。いわゆる「ネット中毒[4]」は、インターネット依存障害（Internet Addiction Disorder=IAD）、ウェブ中毒（Webaholic）、病的インターネット利用（Pathological Internet Use=PIU）、問題性インターネット利用（Problematic Internet Use=PIU）、インターネット乱用（Internet Abuse）など様々な呼び方がされる[5]。

Morahan-Martin（2005）の整理によれば、「中毒」元来の用法である物質（substances）に対する依存を、ギャンブル依存症やネット中毒などの行動（behaviors）に対する依存へと拡大解釈することには論争がある。そこで、物質への依存を敷衍した addiction 概念に対して、衝動制御障害（impulse-control disorder）として理解する立場もある。そのため、上に挙げたように、大きく分ければ、addiction や aholic という「中毒」に焦点を定める用語と Use や Abuse という「使用」法に焦点を定める用語となる。これは、インターネット

環境への依存であるのか、それを利用することへの依存であるのかといった論点に移行していくのだが、これはこの節の終わりで触れる。

日本語では、Internet addiction の訳語である、（インター）ネット中毒または（インター）ネット依存（症）といった用語で知られる。翻訳においても、Young（1998＝1998）では「中毒」、Joinson（2003＝2004）では「依存」と訳されるように、「Internet Addiction」が中毒および依存それぞれに訳されており、定訳はいまだないといってよいだろう。本論では、橋元ら（2002, 2004）で用いられる「ネット中毒」に統一したい。しかしながら、比較的ニュートラルな「依存」に対して「中毒」は、上に論じたように特定の立場性を帯びてしまうため、慎重さも必要だろう。

先に挙げたもの以外にも、ネット中毒の概念化には論争がある。まず一点目に、実質的な中毒に当たる人の少なさ、概念のあいまいさがある。Griffiths（1998）は、それまでの量的なネット中毒の研究が、単なる兆候に過ぎないものまでネット中毒に含まれ、拡大解釈されすぎていることに懸念を示している。そこで、顕著性（Salience）、気分の変容（Mood modificatioon）、耐性（Tolerance）、離脱症状（Withdrawal）、葛藤（Conflict）、再発（Relapse）という六つの厳格な基準を満たすものに限定するべきだと論ずる(6)。また、量的なネット中毒の調査においては、自己申告による調査である点、精神的に有益な活用まで含みこまれてしまう点などに批判を行っている。先に見たように、中毒概念の定義の曖昧性も批判対象である。

さらに、「インターネットに依存するとして、彼らは何に依存しているのか」（Griffiths 1998:72）と疑問を付す。タイピング、コミュニケーション手段、顔を合わせない特異なスタイル、ポルノグラフィーなどそこに含まれる情報、ロールプレイングゲームのような特有の活動、チャットのように誰かと会話をすること、といった様々な依存形態を示している。そこでは、その交雑する依存形態を十把一絡げに論ずる不毛さを描いている。この点は、次の二点目につながる。

二点目に、インターネットというのは、手段であること、環境であることについてだ。Davis（2001）は、pathological internet use(PIU)をインターネットの一般的利用によるものとインターネットの特殊な利用によるものに分類している。前者はインターネットを無目的に時間を浪費してしまうようなものに対し、後者は、オンラインの性的なものや、オンラインギャンブルなどに没頭することである。後者の方はインターネット上にある一領域に依存しているのみであり、例に挙げた性的なものやギャンブルはインターネットなしにも存在するものである。必ずしもインターネット自身に依存していないこれらが、メディアや精神科医によって誇張されていると論じている。

しかしながら、こういった特殊な依存形態においても、インターネットという環境がそれを増幅させる効果も少なからず認められている。Morahan-Martin（2005）は、インターネットそれ自体に問題があるのではなくその活動内容に問題があるという一面を認めなが

らも、他のメディアではできないことが可能となる側面を見過ごしていると指摘する。「オンラインのギャンブルは、いつでも接続できて、即座に反応が返ってくることにより、ギャンブルへの病的傾向の伸長はオンラインによって拍車がかかるかもしれない」（Morahan-Martin 2005:41）等の言明にその姿勢が表れている。Griffiths（1998）も同様の懸念を抱いている。

第二の批判点をまとめれば、インターネットが単なる手段としての面もあるが、それが依存形態をより深刻化するという面も合わせ持つことがわかる。ネット中毒という現象は、それのみにとらわれず、その中身、コンテンツとともに理解されるべきであろう。

これらの批判はもっともである。本論で分析する対象も、そのほとんどは明確なネット中毒者とは到底言い難く、ネット中毒傾向があるのみのものも多く含まれている。また、具体的なコンテンツに踏み込んだ分析も行っていない。しかしながら、医療機関による治療が必要となるような重度のネット中毒者は、数が限られ量的な分析に耐えられるものではない。本論では、ネット中毒傾向を数値化し変数として扱う。重度のネット中毒者に特有の症状などは、質的研究も含めた、今後の研究に期することにしたい。先述したネット中毒概念への批判についても、示唆的な議論にとどめ、本格的な内実の解明は今後に期したい。

2．2．インターネット利用と孤独感について

本節では、ネット利用と孤独感の関係を見よう。

ネット利用と精神への影響については、Kraut et al.（1998, 2002）が著名である。本論で扱う橋元らのデータの研究目的のひとつも、Krautらの研究の日本においての検証であった。

Kraut et al.（1998）は、新規にインターネットを利用したいと考えている人に、ネット環境と料金を提供し、一年間または二年間の利用で社会的なかかわりや精神的健康がいかに変化するかを調査した。その結果から、インターネットの利用が、社会的なかかわりや精神的健康に対してネガティブな方向で有意な影響があることが認められ、この現象を「インターネット・パラドクス」と名付けた。当初、社会に認識されていたインターネットの利用が物理的・地理的な障壁をなくし、社会的なかかわりや精神的健康に対してポジティブな影響を及ぼすという、楽観的予測は覆された。具体的にいえば、インターネット利用時間が増大するほど、家族内や近隣の地域での対面的なかかわりが減少し、孤独感や抑鬱感は増大するという有意な影響が認められた。

この結果の解釈のひとつとして、ネットの利用が「強い絆[7]」に置換された（Displacing strong ties）という仮説をあげている。この「強い絆」やその反意語「弱い絆」は、もともとGranovetterが用いた概念である。Granovetterは、絆の強さを、「ともに過ごす時間量、情緒的な強度、親密さ（秘密を打ち明けあうこと）、助け合いの程度、という4次元を（おそらく線形的に）組み合わせたものである」と定義している（Granovetter 1973=2006:125）。このうち、分析には特に「ともに過ごす時間量」を変数として重用してい

る。

この対比をKrautらはインターネットの利用と関係性の論脈に援用している。「インターネットは潜在的に、強い絆の社会的ネットワークを創造したり維持したりの上で、物理的近接性の重要さを引き下げる」（Kraut et al. 1998:1019）と述べるように、（オフラインで）ともに時間を過ごすことができる環境を重視している。それゆえ、「強い絆」とは「オフライン」の関係性をもとにしたかかわりであり、「弱い絆」とは主にオンライン上の関係性をもとにしたかかわりだと述べる。「強い絆」は対面的な関係を基本に置き、学校や仕事場などでのかかわりにより環境や会話の文脈を共有し、相互扶助がたやすい関係である。一方で、「強い絆」のかわりにオンラインで生み出された「弱い絆」とは、特定のトピックや活動などを共有するのみであるというのだ。

しかしながら、Kraut et al.（2002）で、インターネット・パラドクスは否定されることになる。この研究では、Kraut et al.（1998）の標本に継続調査を行い、さらに新たに別の標本で調査を行った。すると、インターネット使用に孤独感は有意な影響を見せないなど、マイナスな影響はおおむね見られなくなり、むしろポジティブな影響さえ見られるようになっている。本論で用いた、橋元らのデータでも、インターネット・パラドクスはおおむね否定される結果が出ている（橋元ら 2002, 2004）。

この結果の解釈として、Kraut et al.（2002）は実施した二つの調査で同様の結果が見られたことから参加者の慣れや標本の違いでは説明がつかず、時期的なものによると推測している。インターネット利用が、より一般化し、オンライン上で身近な人との交流を促進する環境が整ったためである。「多くの研究が示しているように、インターネットはオンラインでの関係性を継続するためではなく、オフラインによって形成された関係性を維持することに利用している」（Kraut et al. 2002:69）のだが、Kraut et al.（1998）の段階のインターネットの萌芽期は、「弱い絆」であるオフライン空間のみの関係性を維持することにある程度限定されて利用されていたと、推定している。

そして、Kraut et al.（1998）の段階では、インターネットが「弱い絆」の形成に使用され、そのため対面的な「強い絆」の維持にはマイナスに働き、孤独感などを強める結果となったのに対し、Kraut et al.（2002）の段階では、インターネットはオフラインの関係を下敷きにした「強い絆」の補強に使用され、対面的な交流の促進を生み、孤独感などにマイナスの働きをしなかったとしている。

Kraut et al.（2002）では、外向的な人はインターネットによって社会的かかわりを増大し孤独感を減少させるのに対し、内向的な人はインターネットによって社会的かかわりを減少させ孤独感を増大させることが認められている。このようにもともとのパーソナリティによってインターネットの効果が異なる可能性が示唆された。橋元ら（2004）でも、日本において同様の傾向が見られる。

Krautらの分析の中で、本論で検証すべき点が何点かある。

一点目に、Krautらの分析では、インターネットの利用量による孤独感への影響を分析していたが、ネット中毒のような利用形態で見た場合はいかなる結果が得られるのだろうか。

二点目に、インターネットは「弱い絆」を形成するものなのかという問題だ。これをネット中毒の観点から検証しよう。そして、それはネット中毒と孤独感の関係に影響を与えるものだろうか。

三点目に、内向性、外向性といったパーソナリティによって、孤独感への影響が異なるという分析がKraut et al.（2002）で示唆されたが、これはネット中毒においても妥当性を確保できるものであろうか。

以上のことを念頭に置きつつ、以降、分析を進めたい。

3．分析

3．1．分析の前提

これらを確かめるために、橋元良明らが行った二つの調査を二次分析する。これらの調査の概要は次のとおりである。まず、二段無作為抽出法にて全国の一二歳〜六九歳の男女三〇〇〇人を標本とし二〇〇一年に行った訪問留置調査（有効回収票は一八七八票、有効回収率は六二・六％）である。次に、二〇〇一年調査の有効回答者を調査対象とし二〇〇三年に行った、訪問留置調査（有効回収票は一二四六票、回収率は六六・三％）である。この調査の詳しい内容や質問項目などは、橋元ら（2002，2004）にて報告されている。

ここで、本論の中心となるネット中毒尺度、孤独感を測る方法を記しておきたい。ネット中毒尺度を測る質問項目として二〇〇一年調査、二〇〇三年調査それぞれにて、「インターネットが原因で、仕事や勉強、家事がおろそかになることがある」、「家族や友人と話しているより、インターネットにアクセスしているほうが楽しい」、「インターネットのない生活は、退屈でわびしいだろうと思う」、「一日一回はインターネットにアクセスしないと不安に思う」、「インターネットが原因で、睡眠不足になることがある」の五項目を「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の四件法にて問うている(8)。「まったくあてはまらない」を0として、「非常にあてはまる」を3としてリーカット加算し、0から15の値をとるネット中毒尺度を作成した(9)。しかし、値が0に偏りおよそ正規分布とは程遠い分布形であるので、「0→0」「1以上4以下→1」「5以上→2」とリコードして新変数も作成した。リコードをした新変数は、偏りを是正する必要のある、分析1の重回帰分析、（表2）、分析2（表3）、分析3（表4）にて用いた。

孤独感を測る項目は、「私には頼りにできる人がいない」「私の興味や考えは、私の周囲の人たちとは違う」「私は自分の周囲の人たちとうまくいっている」（逆転項目）の三項目である。これを、「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の四件法にて問うている。「まったくあ

てはまらない」を0として、「非常にあてはまる」を3としてリッカート加算し、0から9の値をとる孤独感尺度を作成した[10]。

以降の分析は、ネット中毒に関する質問項目に回答があったものを対象とする。ネット中毒尺度を構成する質問は、（PC、携帯電話、PHSによるいずれの利用も含めて）インターネット利用者に限定したサブクエスチョンであり、回答者はインターネット利用者に限定される[11]。

3．2．分析1――ネット中毒と孤独感の連関

まず、ネット中毒という質を表す変数とPCのネット利用時間やケータイのウェブアクセス頻度という量を表す変数の関係を簡単に確認しておこう。Spearmanの相関分析にかけた。その結果は表1のとおりである。

ここでは、PCネット利用時間とネット中毒との関連性で特に強く現れる。Young（1998＝1998）でも利用時間とネット中毒との関連を述べている。実際の分析でも、これらは同様の傾向を見せることも多いのだが、違った側面を見せることもある。そのひとつが孤独感への影響である。

表1

		PCネット利用時間	ケータイによるウェブへのアクセス頻度
ネット中毒尺度	相関係数	0.429***	0.116*
	人数	402	336

値はSpearmanの順位相関係数
*:p<.05 **:p<.01 ***:p<.001

それは、以下のように行った二〇〇一年調査にて重回帰分析でわかる。

孤独感尺度を従属変数として、ネット中毒尺度、ネット利用時間[12]、ケータイによる情報サイトへのアクセス頻度[13]、性別、年齢、同居する家族人数[14]、一時間以内で会える友人数[15]、会うのに一時間以上かかる友人数[16]、世帯年収[17]、を独立変数に置き、重回帰分析を行った。結果は、表2のとおりである。

これを見ると、以下のことがわかる。まず、孤独感をもたらす要因として、性別など他の要因を統制しても、一時間以内に会える友人数、性別、ネット中毒尺度、世帯収入の影響力が有意に残ることがわかる。さらに、PCによるネット利用時間やケータイによるウェブ使用頻度の有意性は見られず、これらの影響はこの分析からは認められない。PC、ケータイによる利用の量ではなく、その中毒的な利用という質に問

表2

従属変数：孤独感	標準化係数β
ネット中毒尺度	0.122**
PCネット利用時間	-0.013
ケータイによるウェブへのアクセス頻度	-0.014
性別（男性=1、女性=2）	-0.129***
年齢	-0.058
同居家族数	-0.045
1時間以内で会える友人	-0.150***
1時間以上かかる友人	-0.015
世帯年収	-0.088*
人数	654
決定係数	0.068***
調整済み決定係数	0.055

*:p<.05 **:p<.01 ***:p<.001

題があることが示唆される。

3．3．分析2――ネット中毒と孤独感の因果関係

ただし、単年度の分析においては、因果関係についてまだ確言できない。

前述した通り、Young（1998=1998: 159-60）は、ネット中毒をもたらす原因として孤独感が最も多かったと集計している。このように、孤独感がネット中毒をもたらすという逆方向の因果関係の可能性もある。そのため、パネル調査を利用して分析を進めたい。交差的時間差による（偏）相関分析にて因果関係を特定したい。

以降では、二〇〇一年調査におけるという意味で「01」を用い、二〇〇三年調査も同様に「03」と略す。まず、ネット中毒01と孤独感03の相関分析を行った（図1の実線部分）。ただし、孤独感01を先行変数とする疑似相関の可能性が残る。つまり、孤独感01がネット中毒01および孤独感03にそれぞれ影響を及ぼしてしまったがために、ネット中毒01と孤独感03に相関関係が生じてしまった可能性である（図1の点線部分）。そこで、その可能性を除去するために、孤独感01を統制変数としたネット中毒01と孤独感03の偏相関分析を行った[18]。

これとは逆に、孤独感01とネット中毒03の相関分析、ネット中毒01を統制変数とした孤独感01とネット中毒03の偏相関分析も行った。以上の分析結果を表3にまとめてある。

ここで、二〇〇三年の状態が二〇〇一年の状態に影響を及ぼすことは時間軸としてありえないので、因果関係の方向性が特定できる。なお、この分析では項目間の比較を容易にするため、ネット中毒01およびネット中毒03に回答した標本に限って分析をしている。

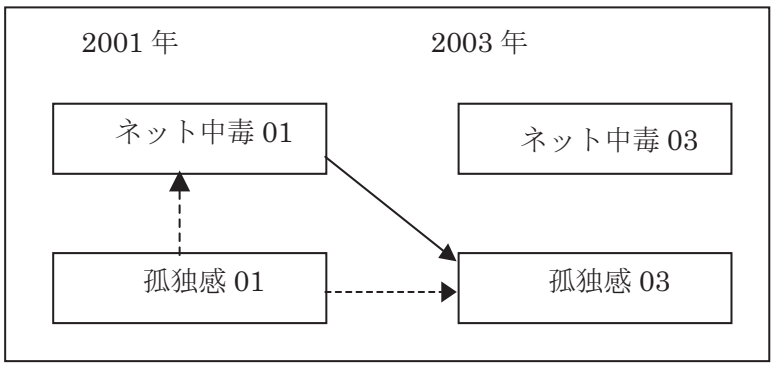

図 1

表 3

	（偏）相関係数	人数
「ネット中毒 01」→「孤独感 03」単相関	0.159***	441
「孤独感 01」→「ネット中毒 03」単相関	0.053	436
「孤独感 01」を統制変数としたときの、「ネット中毒 01」→「孤独感 03」	0.101*	432
「ネット中毒 01」を統制変数としたときの、「孤独感 01」→「ネット中毒 03」	0.002	433

値は、Pearson の相関係数、または偏相関係数
*:p<.05 **:p<.01 ***:p<.001

これをみると、単相関分析であっても、孤独感01を統制変数としたときの偏相関分析においても、ネット中毒01は孤独感03へ有意な

影響を与えていることが認められる。いっぽうで、孤独感01からネット中毒03へは、単相関分析、ネット中毒01を統制変数に加えた偏相関分析、いずれの場合も有意が認められなかった。ゆえに、孤独感はネット中毒を引き起こさず、ネット中毒が孤独感を引き起こすといえよう[19]。

3．4．分析3――「弱い絆」「強い絆」は、ネット中毒と孤独感の媒介変数となるのか

ここでは、Krautらの「ネット中毒による孤独感は強い絆の衰退によるもの」という仮説を検証したい。図1および表3と同様の要領で、単相関分析および偏相関分析を行い、家族結束度[20]や1時間以内で会える／一時間以上かかる友人（リコード方法は表1で用いたものと同様）について分析を行った。標本は、さきほどの分析と揃えるため、両方の調査のネット中毒尺度に回答したものである。結果を表4にまとめた。

表4

	（偏）相関係数	人数
「ネット中毒01」→「家族結束度03」単相関	-0.081	441
「ネット中毒01」→「1時間以内で会える友人03」単相関	-0.022	438
「ネット中毒01」→「1時間以内以上かかる友人03」単相関	0.009	439
「家族結束度01」を統制変数としたときの、「ネット中毒01」→「家族結束度03」	-0.065	436
「1時間以内で会える友人01」を統制変数としたときの、「ネット中毒01」→「1時間以内で会える友人03」	-0.048	424
「1時間以上かかる友人01」を統制変数としたときの、「ネット中毒01」→「1時間以上かかる友人03」	0.024	425

値は、Pearsonの相関係数、または偏相関係数
*:p<.05 **:p<.01 ***:p<.001

表4で見られるところでは、負の（偏）相関傾向を示すものが多いが、有意水準に達しない。ネット中毒と孤独感の間の媒介変数とみなすには心もとない結果である。家族結束度や一時間以内の友人数に見られるように、「強い絆」の衰退が孤独感を引き起こすという論拠には乏しい。また、一時間以上の友人からわかるように、逆に「弱い絆」が増大したとも認められない。

また、そもそも「弱い絆」が精神的健康を阻害するのかという問題もある。そもそもGranovetter（1973=2006）が、「弱い絆の強さ」として、情報収集に対する弱い絆の有効性を論じたように、「弱い絆」は肯定的な解釈がなされることも多い。

Krautらが述べる、オフライン＝「強い絆」、オンライン＝「弱い絆」との峻別は、あまりにも単純化しすぎた分析ではないだろうか。これらを、ネット中毒と孤独感の間の媒介変数とすることには無理があろう。オフライン＝強い絆、オンライン＝弱い絆、あるいはその逆といった、平板な図式では、ネット中毒と孤独感の関係は読み解けない。

3．5．分析4――ネット中毒と自己開示傾向の連関

では、ネット中毒のいかなる部分が、孤独感を誘起しているのだろうか。この点をネット中毒とその自己開示傾向から考えてみよう。自己開示傾向は、前述したGranovetterが示す「絆の強さ」を測る

基準のうち、情緒的な強度や、親密さにあたると考えられ、インターネットと絆の強さを分析するうえで一つの指標となりうるからだ。対面接触頻度とは違った側面が見られるだろう。

ただし、この点に関しては今回扱うデータの質問項目の制約もあり、また二〇〇三年のみの質問項目のため、因果関係を同定できるものではない。ゆえに、本節の分析には限界があることも付記したい。確言するには至らず示唆的なものに留まることをあらかじめ断わっておく。

二〇〇三年調査では、「自分自身のことや考え、感情をどれくらい話すか」という自己開示度を聞いている[21]。これと、ネット中毒尺度を相関分析[22]にかけた。その結果を表5にまとめてある。

これを見ると、自己開示傾向とネット中毒尺度の間には、「知り合ったばかりの人」「ネット上だけで知っている人」では、有意性が認められる。また、有意水準には達しないものの、すべての関係において正の相関の方向性を示している。つまり、ネット中毒であるものは、いずれの関係へも自分のことや、考えや感情などを話していると答えているのだ。

表 5

		特に親しい友人	月に一回くらい会うような知り合い	知り合ったばかりの人	ネット上だけで知っている人
ネット中毒尺度	相関係数	0.035	0.049	0.109**	0.249***
	人数	658	614	572	189

値は Spearman の順位相関係数
*:p<.05 **:p<.01 ***:p<.001

ここで明らかになる興味深いことは、ネット中毒傾向がある人が「オンライン」と「オフライン」で一致した傾向を見せるということ、ネット中毒傾向にある人は外向的であるということ、ネット中毒傾向にある人がどの関係性にも自己開示傾向が強いこと、である。より詳しく見てみよう。

一点目に、Kraut らが述べるような、「オフライン」の絆の代替としての「オンライン」の絆という仮説がネット中毒においてはあてはまらないということだ。「ネット中毒傾向」が、自己開示に対し「オフライン」と「オンライン」において一致した傾向を見せるということは、これらが代替的に作用しているというより、相補的に作用していると理解すべきだろう。

二点目に、ネット中毒傾向にあるものは、ネット中毒傾向がないものに比べ、自己開示を「オフライン」「オンライン」にかかわらず行っている。それだけ開放的なコミュニケーションを行っているということは、むしろ外向的であるといえる。自己開示傾向から見れば、外向的であることと孤独感は両立しているのである。Kraut らが述べる、ネット利用において内向性が孤独感を強めるという議論にも留保が必要だろう。

三点目に、ネット中毒傾向にあるものは、より自己開示を行っている。これは、自己のより深部を共有するような関係を「オンライン」「オフライン」を問わず欲し、それを実際に得ているといえる。

ここで、この衝動を強い絆と即断することは危険である。しかしながら、鈴木謙介が、「オンラインゲームの廃人」たちを分析して「問題なのは家にこもって他者とコミュニケーションをとらないことではなく、むしろオンラインでの『コミュニケーション過剰』にある」（鈴木 2002:145）と分析しているように、ネット中毒がむしろコミュニケーション過剰という「強い絆」傾向をはらみながら、それが問題となっている点は、考慮に値するだろう。

4．議論

4．1．考察

本論では、ネット中毒と孤独感の関係についての研究を振り返る過程で、まずネット利用と孤独感の関係をみた。Kraut et al.（1998）による研究では、インターネットが孤独感を誘起することが指摘され、これは「インターネット・パラドクス」の一部を構成するものだった。そのひとつの仮説として、インターネットが弱い絆を養成し、それが孤独感につながるというものがあった。これが、ネット中毒にもあてはまるかを検証することが本論の目的であった。

その結果は、分析1でネット中毒と孤独感の強い連関が認められ、分析2でネット中毒が孤独感を誘起する因果関係を見た。分析3では、その媒介として「弱い絆」「強い絆」の議論が不適切であることを示した。分析4では、自己開示傾向という「強い絆」志向ともいえる側面が、ネット中毒傾向にあるものに見られることから、自己開示傾向が孤独感を誘起している可能性があることを示唆した。では、自己開示をし、強い絆を形成したと思われるにもかかわらず、ネット中毒傾向にあるものが孤独感を抱くのはなぜだろうか。それを推し測るために、辻（2005）の議論を参照しよう。ケータイをはじめとする電子メディアがつながりを促進させるものの、つながりのない「絶え間」が際立ってしまい孤独感が生まれる。その部分をつながりで埋めようとすると、さらに埋められなかった「絶え間」がいっそう際立ち、つながりの常態化への際限のない希求が生まれる……という負の循環構造の存在を示唆している。

中村功は、先行研究を援用しながら「そもそも孤独感とは、社会的関係の達成水準と願望水準の差がある時に生ずる不快感である」とまとめている（中村 2001:89）。あらゆる感情がそうであるが、孤独感においては特に、理想と現実の落差に生まれるものだ。辻の議論は、携帯メディアによるコミュニケーションの利便性向上により、つながりに対する理想水準があがってしまい、現実認識をシビアに捉えてしまうことによると理解できる。

これを本論にひきつけて考えるならば、ネット中毒傾向にあるものは、自己開示傾向に見られるような「強い絆」志向と、（オンラインであれ、オフラインであれ）それが満たされない場面との落差によって孤独感が導かれているのではないだろうか。

本論で示されたとおり、ネット中毒はネット使用量の過多というのみでは測りきれない要素がある。分析1で見たように単なる量的

な利用の多寡が孤独感に影響をしないからである。利用量という側面から見た場合、インターネット・パラドクスは否定される研究も多いが、ネット中毒という視座をとるならば、これは孤独感を誘起するというインターネット・パラドクスを支持する面もあることがわかった。しかしながら、その内実は、弱い絆が形成されるからという安直なものではないことも、また重要な点である。

ネット利用と孤独感の関係には、ネットの使用「量」ではなく「質」という要素を取り入れるべきだ。そうすることによって見えてくる地平は、現在までのインターネット・パラドクスにまつわる研究に一石を投じるものとなろう。このような点を鑑み、ネットの功罪を一方的に裁断することなく、丁寧に解きほぐす作業が必要である。

4．2．課題

本論では明らかにできなかった課題が何点かある。

最大の課題は、ケータイによるネット中毒、PCによるネット中毒、両方によるネット中毒、といった情報メディアの形態別の分析が出来なかった点である。ネット中毒を測る設問が、ケータイおよびネットいずれの利用者も回答しているため、いずれの利用によるものも混在して回答している。ケータイおよびPCのそれぞれの利用者に限れば、標本数が分析に堪えうるほどに確保できず、これらを分離して分析することがなかなか困難であった。今後の調査にて、質問票に工夫を凝らし、ケータイおよびPCそれぞれによる分析が必要であろう。

さらに、どのような孤独感が誘起されるのかという点も興味深い。落合良明が、「孤独感にはさびしいとか暗いといった孤独感ばかりではなく、明るく充実した孤独感もある」（落合 1999:i）と述べている様に、孤独感のうちにポジティブな要素とネガティブな要素がある。また、曹（2004）など孤独感をさまざまな因子に分類する研究もおこなわれている。孤独感を細分化し、インターネット中毒がいかなる孤独感を誘起するのか、さらなる研究が必要であろう。

インターネットと孤独感の関係でいえば、Moody（2001）は情緒的孤独感と社会的孤独感に分けて分析を行っている。これによれば、インターネット利用は社会的孤独感を低減する効果を有意にもつものの、情緒的孤独感には有意な影響を持たない。インターネットの肯定的側面が情緒面には及びにくいことを示している。ネット中毒は、情緒的な依存傾向を引き起こすと思われるが、これが情緒的孤独感に影響されるものなのか、後続の研究に期したい。

謝辞

二次分析のためのデータの提供をご快諾頂いた、橋元良明先生ほかの関係者の先生方に深謝申し上げます。

注

（1）以降、「インターネット」および「ネット」という言葉を、文脈に従って併用するが同様の意味と考えてよい。

（2）岩田らは、それが顕著に現れている若者に焦点を絞って分析を行って

いるが、この傾向は、多かれ少なかれ社会全体に広がっていると考えてよいだろう。

（3）平井ら（2006）の調査ではオンラインゲーム利用とひきこもり・不登校の傾向に正の相関関係が見られるように、ネットとひきこもり傾向の関連は、未解明のところも多い。

（4）Joinson（2003＝2004）によれば、Internet addiction disorder という言葉は、イヴァン・ゴールドバーグのジョークがもとになった。

（5）インターネットに限らず情報機器への依存傾向があるテクノ依存症、オンラインまたはオフラインのゲームに依存傾向がある（オンライン）ゲーム中毒／依存症などは隣接的、重層的な領域である。また、一般的な読み物であるが、二階堂（2007）は「ミクシィ中毒」、「検索マニア」、「ネットストーカー」など、様々なネット中毒の形態を紹介している。このような依存症名の創出は際限なく行うことができるが、おしなべて「依存症」という病理的理解に包摂されていくメディカリゼーションには懸念を持つべきだろう。

（6）六つの症状の訳出は、Joinson（2003＝2004）にて用いられる訳語を参照した。

（7）Granovetter などが用いる ties は、社会学の文脈で「紐帯」と訳されることも多いが、本稿では、後半で情緒的な意味をも持たせるので、この要素をよく表徴すると考えられる「絆」を用いる。

（8）Young（1998=1998）を参照して作られた質問項目である。

（9）有効回答七七六票で、クロンバッハの α 係数は 0.845 であった。この質問項目はケータイおよびＰＣによるネット利用者に限られるサブクエスチョンのため有効回答が少ない。

（10）有効回答一八四八票で、クロンバッハの α 係数は 0.433 であった。この値は、必ずしも高いとは言えないが、三質問それぞれの相関 $p<0.001$ 水準で有意であり、一定の妥当性は確保している。また、Kraut et. al., ら（1998, 2002）の研究でも、孤独感のクロンバッハの α 係数は 0.5 程度であり、クロンバッハの α 係数の低さは本論に限った現象ではない。

（11）ただし、ここではケータイ利用のネット中毒か、ＰＣ使用のネット中毒かは確定できない。

（12）平日および休日のＰＣによる利用時間を本調査では問うている。橋元（2002）にならい、平日の利用時間×5＋休日の利用時間×2を一週間あたりの利用時間として変数を作成した。しかし、偏りがあり、非回答者を分析に加えるため、非回答者（〃ＰＣ非利用者）を0（ＰＣによるネット非利用者）、二七〇分以内の利用を1（ＰＣによるネット利用時間の少ないもの）二七一分以上の利用を2（ＰＣによるネット利用時間の多いもの）としてリコードした。

（13）ケータイによるウェブ利用頻度を問うている。これに非回答者（〃ケータイによるウェブ非利用者）を0、「ほとんどアクセスしない」「月に1回以下」「月に数回程度」を1、「週に数回程度」「1日に1回くらい」「1日に数回以上」を2とリコードした。

（14）同居している家族数に回答者分の1を加え、何人家族かの新変数を作った。ただし、五人以上の家族は少ないため、「5」とまとめてある。

（15）一〇〇人以上の回答など値が偏っているため、二人以下を0、三人以上六人以下を1、七人以上を2とリコードした。

（16）脚注15と同様の理由で、一人以下を0、二人以上四人以下を1、五人以上を2とリコードした。

（17）二〇〇万円未満を0、二〇〇万円以上四〇〇万円未満を1、四〇〇万円以上六〇〇万円未満を2、六〇〇万円以上八〇〇万円未満を3、八〇〇万円以上を4とリコードした。

（18）該当する、ネット中毒や孤独感を構成する質問に答えたものすべての標本を分析に利用している。

（19）ただしこの効果には、二年間のインターネット利用を原因に持つもの（時代効果）のほかに、二歳分年齢が増したこと（年齢効果）の可能

性が考えられる。しかし、表1のとおり、年齢変数は孤独感に対して有意な影響を持っていないので、この可能性はここでは考慮に入れない。

(20) 橋元ら（2002, 2004）で用いられた操作的な変数を本論でも利用した。具体的には、「私の家族は、みんなで何かをするのが好きである」「私の家族では、自由な時間はいっしょに過ごしている」「私の家族は、困ったとき、家族の誰かの助けを求める」の三質問の回答を、先述の「孤独感」と同様にリーカット加算して構成した。

(21) 「そういった人はいない」「表面的な話しかしない」「あまり深く話さない」「ある程度深く話す」「できるだけ深く話す」という選択肢がある。「表面的な話しかしない」を1として、「できるだけ深く話す」を4とおいて、分析を行った。「そういったひとはいない」は欠損値として扱ったため、表5の標本数にばらつきがある。しかし、「そういったひとはいない」を0として分析に加えても、この傾向に大差ない。

(22) 自己開示度が順序尺度のため、Spearmanの相関分析を行った。順位相関をとる場合、分布に偏りがあっても構わないため、ネット中毒尺度はリコードを行っていないものを使用した。リコードを行ったものでも相関係数や有意確率が若干落ちるが、ほとんど同様の傾向が見られる。標本は二〇〇三年回答者のうち、該当する設問に答えたものすべてを対象にしている。

引用文献・ウェブサイト

Davis, R. A., 2001, "A cognitive-behavioral model of pathological Internet use," *Computers in Human Behavior,* 17: 187-95.

Granovetter, Mark S, 1973, "Strength of Weak Ties", *American Journal of Sociology,* 78(6): 1361-80.（＝2006、大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳、『リーディングス　ネットワーク論――家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房、123-54）

Griffiths, Mark, 1998, "Internet Addiction: Does It Really Exist?," Jayne Gackenbach ed., *Psychology and the Internet,* Academic Press, 61-75.

橋元良明・石井健一・木村忠正・辻大介・金相美、2002、「『インターネット・パラドクス』の検証――インターネットが精神的健康・社会的ネットワーク形成に及ぼす影響」『東京大学社会情報研究所　調査研究紀要』、18:335-485

――、2004、「パネル調査によるインターネット利用の影響分析」『東京大学社会情報研究所　調査研究紀要』、21:305-454

樋口康彦、2006、『「準」ひきこ森――人はなぜ孤立してしまうのか?』講談社

井出草平、2007、『ひきこもりの社会学』世界思想社

ITmedia News、2007. 6. 15、「ネット・ゲーム中毒を精神障害に分類」――米学会が推奨、（http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0706/15/news075.html）、二〇〇七年十一月九日閲覧

岩田考・羽渕一代・菊池裕生・苫米地伸編、2006、『若者たちのコミュニケーション・サバイバル――親密さのゆくえ』、恒星社厚生閣

Johansson, Agneta and K. Gunnar Götestam, 2004, "Internet Addiction: Characteristics of a questionnaire and prevalence in Norwegian youth (12-18years)," *Scandinavian Journal of Psychology,* 45(3): 223-9

Joinson, Adam N, 2003, *Understanding the Psychology of Internet Behavior,* Palgrave Macmillan.（＝2004、三浦麻子・畦地真太郎・田中敦訳、『インターネットにおける行動と心理』北大路書房）

小林久美子・坂本章・足立にれか・内藤まゆみ・井出久里恵・坂本桂・高比良美詠子・米澤宣義、2001、「大学生のインターネット中毒――中毒症状の分布と関連する要因の検討」『日本心理学会第65回大会発表論文集』、863

Kraut, Robert. et al., 1998, "Internet Paradox," *American Psychologist,* 53 (9): 1017-31.

和田正人′ 2001′「大学生のインターネット中毒とインターネット不安の関連についての実証的研究」『東京学芸大学教育学部附属教育実践センター研究紀要』26: 199-207

Young, Kimberly, 1998, *Caught in the Net*: *How to Recognize the Signs of Internet Addiction-and a Winning Strategy for Recovery* ,John Wiley & Sons.（=1998′ 小田嶋由美子訳『インターネット中毒――まじめな警告です』毎日新聞社）

――.et al., 2002, "Internet Paradox Revised," *Journal of Social Issues,* 58（1）: 49-74.

Moody, Eric J, 2001, "Internet use and Its Relationship to Loneliness", *Cyber Psychology & Behavior,* 4(3),393-401.

Morahan-Martin, Janet, 2005, "Internet Abuse: Addiction? Disorder? Symptom? Alternative Explanation?," S*ocial Science Computer Review,* 23(1), : 39-48.

中村功′ 2002′「携帯メールと孤独」『松山大学論集』′ 14（6）: 85-99

二階堂祥生′ 2007′「〝クシィ中毒′ 検索マニア′ ネットストーカー――続々誕生する新種『ネット依存症』の深刻度」『読売ウイークリー』′ 66（4）: 21-4

落合良明′ 1999′『孤独な心――淋しい孤独感から明るい孤独感へ』サイエンス社

長田洋和・上野里絵′ 2005′「ネット中毒をめぐって――Internet Addiction Test (IAT) 日本語版について」『アディクションと家族』22(2): 141-7

袖山紀子・畑中公孝・堀孝文・朝田孝′ 2003′「いわゆる「インターネット中毒」の1例」『精神医学』45(9): 995-7

墨岡孝′ 2001′「インターネット依存症の実態」『プシコ』2(4): 62-9

鈴木謙介′ 2002′『暴走するインターネット』イーストプレス

総務省′ 2007′ 報道資料『平成18年「通信利用動向調査」の結果』（http://www.soumu.go.jp/s-news/2007/pdf/070525_1_bt.pdf）′ 二〇〇七年十一月九日閲覧

曹陽′ 2004′「改訂版UCLA孤独感尺度邦訳版に関する検討」『関西大学大学院人間科学――社会学・心理学研究』61: 157-70

Shapira, Nathan A., Toby D. Goldsmith, Paul E. Keck Jr. Uday M. Khosla, Susan L. McElroy, 2000, "Psychiatric features of individuals with problematic internet use," *Affective Discord,* 57: 267-72.

辻大介′ 2005′「電子メディア上のかかわり」井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』有斐閣′ 155-72

Does Internet Addiction Induce Loneliness?

NAKAGAWA Shoichi

Today the phenomenon called "Internet addiction" has attracted people's attention. However, there has been little reliable statistical research on this topic. So, in order to get higher reliability, this paper gives a secondary analysis of the nationwide survey reserch data conducted by Hashimoto et al. In previous reserch, Kraut et al. identified the "Internet paradox," which is the phenomenon in which the Internet reduces the social involvement and psychological well-being. Although they pay attention to the amount of the net use, the quality and style of use, such as Internet addiction, is not discussed. Taking this matter into account, this paper focuses on the connection between Internet addiction and loneliness, an element which measures psychological well-being.

The results of the analysis are as follows: First, a statistically significant increase in loneliness resulting from Internet addiction is observed even if demographic variables such as gender, the time of Internet use via PC, and the frequency of web use via mobile phone are controlled. Second, it is indicated that loneliness does not induce Internet addiction, but that Internet addiction induces loneliness. Third, it turns out that Internet addiction does not have a statistically significant influence on the degree of family unity and the number of friends. This shows that "strong ties" between family members or between friends are not lost by the Internet addiction. In other words, the intensity of the "strong/weak ties" does not become a mediating variable between Internet addiction and loneliness. Fourth, it is found that the more people are likely to be addicted to the Internet, the more they tend to be self-disclosing in both on-line and off-line relationships. Therefore, it can be presumed that the level of aspiration for relationships rises with an increase in the tendency toward self-disclosure, and that this generates loneliness.

Keywords: Internet addiction, loneliness, internet paradox, storong/weak ties, self-disclosure